

茅葺き古民家訪問記

東久留米市「村野家住宅」

岡 哲文

この記事は二〇一一年五月二二日に主催された村野家公開見学会の内容です。年月が経っているため、現在とは内容が異なるかもしれませんが、悪しからずご容赦下さい。

二〇一〇年一月二二日付けの朝日新聞多摩版のページに写真入りで注目すべき記事があった。東久留米市柳窪地区にある「村野家住宅」が、国の登録有形文化財に内定したと報じている。記事によると柳窪地区は江戸・明治期の建物が数多く残り、同家はその中でも地区の代表的な住宅で、一帯は「柳窪の旧集落」と呼ばれる。

主屋は一八三八年（天保九）に建てられ、名主として幕府の役人を迎えたために上質な座敷を備え、今も茅葺き屋根を保っている。一八六六年（慶応二）の「武州世直し一揆」で貧しい農民に襲われてできた刀傷が残る柱が現存している。

今回、国の登録有形文化財に認定されたのは、住宅主屋、離れ、土蔵、穀倉、新蔵（しんぐら）、薬医門、中雀門（ちゅうじゃくもん）の七件である。

見学会等があるのならば、是非行ってみたいと思います、問い合わせたところ、地元NPO法人が主催しているとのことなので、資料を送っていただいた。市民には市報で案内するが、市外者の私にはほかに知るべきがない。

年が明けてから実際に見学会の日程を教えてください、二〇一一年五月二二日の一三時に申し込みをした。

武蔵小金井駅から東久留米行きのバスに乗りして、柳窪一丁目のバス停で下車する。案内掲示板が出ているので、それに沿って歩いていく。事前に周辺地図をもらっていたので、それも参考にした。やがて雑木林が目に入り、その中に住宅地がある。東久留米にもまだこのような場所があったのだと、びっくりしながら進むが、案の定、道に迷ってしまった。たまたま目に付いた家の標識を見ると「村野」と書いてあるので、窓越しにいた女性に訊ねたところ、ここではなくて、もっと先の家だとのこと。またこの辺り一帯は皆村野姓だということも教えてもらった。言われた通りの道順で行くと、どうもそれらしい人たちや見学希望者が門の前で受付をしていた。私も受付を済ませて門の中に入った。

まずは薬医門の説明を受ける。薬医門は四つの柱、大きなはりが特徴であり、もともと

幕末の初代当主七次郎氏の時、長屋門として建造計画があり、許可を受けていた。江戸時代は許可を得ずに、このような門を作ることはできなかったが、この屋敷は許可を受けていた。だが、建てる間もなく明治維新になったためか、実現に至らず、薬医門として二代目の七次郎氏によって明治十四年に改めて建造された。この門は別名「日の出門」という。それは元旦の朝、眺望がよかった当時の武蔵野の野からあがる初日の出を見ることができたから名付けられた。



村野家の薬医門、日の出門ともいう。主屋の玄関式台。下は穀蔵。

村野家母屋は茅葺きの入母屋造り。六間取りの代表的な農家であり、この地域で一番古く、代々の当主の努力により、一度も火災に遭わずに今日まで維持保存された。屋根の葺き替えは大作業のため、毎年二割位ずつ葺き替えを行っている。昭和四〇年代まで、この辺りは皆茅葺きであったが、その後ほかが全部瓦屋根にする中、村野家のみ頑張って茅葺きを維持してきた。昔は茅場があちこちにあったが、次第に宅地化され減少していき、茅が貴重になっていった。そのため、特産の柳窪小麦という小麦があり、麦の草丈が通常の一・五倍と長いため、藁屋根にも利用された。

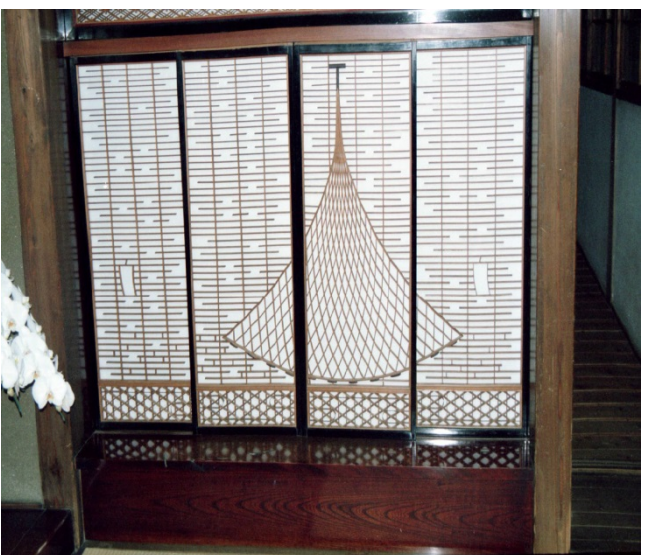
母屋の主要部分は天保九年（一八三八）の建造で、玄関式台は昭和元年に改築された。松鷹、寿老人が鶴に乗る見事な懸崖がある。これは数年前に彫り直して付け替えた。その後安政四年（一八五七）に、左側に二間座敷を増やした。

次の穀蔵（こくぐら）は、穀物を入れておくための蔵であり、穀物の出し入れをするために庇の大きいのがついた。作りは土蔵造りといい、屋根の上まで土で固めるといいう作り方である。防火対策もあり、庇の上に置き屋根があるのが特徴である。

この穀倉に接して新蔵がある。明治中ごろの建造であり、戸口の前に板の間が設けられ、八畳の蔵座敷につながる。ここは現在のご当主の母上様が茶道をたしなんでおり、そのために茶室に改造されており、現在は茶室として使われている。

前庭と奥庭を隔てるために主屋と新蔵の間に建てられているのは中雀門である。この門

は文化庁が調査に来た時に目を付けて、急きよ指定の追加となった。板壁を含めて非常に凝った意匠であり、この時代の数寄屋の上品な雰囲気を残すものとして評価された。



上は式台玄関の懸魚。下は障子の干網の江戸組子。

主屋の奥の間（二間）は前述したとおり、初代により安政四年に増築され、付書院には障子を色々工夫してデザインした、江戸組子の「網干」や近江八景を描いた障子擦ガラス、欄干の彫刻や襖絵などの建具が並ぶ。

慶応二年に武蔵西部一帯で発生した打ちこわし「武州世直し一揆」の際に、ここ村野家も襲撃対象になり、多くの損傷を受け、今も床柱、長押などにその生々しい傷跡が残っている。

武州世直し一揆は、横浜貿易の展開や長州征伐の動乱により、山村・畑作農村の急激な米価高騰による生活苦が発生し、米穀の安売りを要求したが断られたことが原因とされ、秩父上名栗村に発生し、瞬く間に武州と上州に広がり、参加者は周辺の五カ国、数十万人に及び、豪農・豪商など五百数軒が打ち壊された。この辺り一帯は天領であり、幕府の代官で、葦山反射炉で有名な江川太郎左衛門英龍（一八〇一〜一八五五年）の領地であり、太郎左衛門は農兵隊に一揆鎮圧命令を出した。この農兵隊は、文久三年（一八六三）に、江川代官支配所に設置された。

秩父から所沢、東村山にかけて、相当数（約二〜三〇〇軒）がこの一揆により倒されなくなかった家もある。傷跡が残っている家もかなりあるものの、その後建て替え等でみんな無くなってしまったが、村野家はこれを歴史の証明として残しておいたのである。

村野邸には離れがあり、この離れは三代目当主夫人の実家田無の下田家で隠居所として明治後期に建造された後に、大正期に当家に譲られた。昭和二五年に玄関部が洋間に改造された。現在は十畳の和室からなり、主屋奥の間と同じく贅を尽くしており、付書院欄間には著名な島村俊表（しゅんぴょう）のサイン入りの鶏と松の彫刻があり、主屋同様に江戸組子の「網干」がある。尚、渡り廊下は「うぐいす張り」となっている。

土蔵は漆喰仕上げであり、大事なものを貯蔵していたため、土蔵破りを防ぐように造られている。昔はこの家も土蔵破りの被害に遭ったのだが、それを防ぐために一メートルぐらゐの小棒が一階周囲に埋め込まれている。以前は主屋とつながる廊下があり、現在は生活用品が収められている。



土蔵の外観と下は武州一揆で受けた柱の傷跡が生々しい。母屋奥の間にもある江戸組子。

この後、見学者全員に、敷地内の茶畑で採れたお茶を入れてもらい、当主の詳しい話を伺った。この日のお茶は去年採れたお茶である。本来なら前述した柳窪小麦で作ったまんじゅうが振る舞われた。柳窪小麦で作ったまんじゅうは、この前の見学者が百数十人来たためになくなった。この村は産物が特になく、米も取れなかったため、最近柳窪小麦という品種が復活し利用するようになった。

その後簡単に幕末から戦後にかけてのこの村について話された。この辺りの農家は食べるだけが精いっぱい、田んぼも麦もなく、粟や稗だけを作っていたこと。大麦ができるようになったが、戦争中はそれも供出するようになったことなどが語られた。

この説明会が終わって、帰路につき始めた途端に、スコールのような大雨が降り始めた。何だか説明会が終わるのを待って降り始めたような気がした。

村野家見学会に対する問い合わせ先。

NPO法人東久留米の水と景観を守る会 電話 〇四二・四七二・六六八四 佐藤

柳窪の環境・景観の保全を考える会 電話 〇四二・四七一・四六四一 奥住

参加費 五百円（資料代・同家の維持協力費を含めて。）

東久留米市外に在住の方は事前の確認が必要です。